



## ディスポーザーシステムの生い立ち！

1927年	米国でディスポーザー発明	
1950年代	米国でディスポーザーが本格的普及始まる 米国から日本への輸入が始まる	年間200万台の販売(単体設置)
1960年代	国産メーカーが相次いで誕生する	
1985年	国内のディスポーザー単体設置台数が約30万台を超える	
1990年	下水処理場等への負荷影響が問題化し、自治体はディスポーザーの単体設置を自粛・禁止とする	
91年～95年	自粛・禁止にも関わらず、年間2～4万台が輸入され国内販売される	
1993年	日本国内・民間企業がディスポーザーシステムの共同開発に着手	
1994年	旧建設省・建築研究所でディスポーザーシステムの実証実験がスタート 平成6年、7年、8年の3ヶ年事業	
1997年	都市基盤整備公団・高島平でフィールド実験実施	2003年終了 
1998年	ディスポーザーシステムで建設大臣認定制度発足 国内メーカーで認定第1号誕生 OEM制度も活用し、相次いでメーカー誕生する	
2000年	(社)日本下水道協会の性能基準(案)による、適合評価制度発足となる	
2004年	東京都が独自に規制強化(平成16年基準案作成)	
2006年	各社一斉に東京都独自規制(平成16年基準案)をクリアー、認証取得する	
2008年	各社による処理槽の小型化・認証取得が活発化する	
2011年	ディスポーザーシステムによる、ディスポーザー設置台数45万台に達する	

### ディスポーザー生ゴミ排水処理システム・誕生劇

ディスポーザー生ゴミ排水処理システムは、建設省の大臣認可でスタート致しました。本来、生ごみは一般廃棄物であり厚生労働省の所管です。建設省は、その省壁を越えて生ゴミ減量に挑みました。また環境省も推進の旗振りをしたとも言われています。画期的なのは厚生労働省の権限移譲をも超える雄姿です。こうして新しい生ゴミ処理方式が生まれたと聞き及んでいます。

誕生初期のシステムは生ゴミを水に変えるためには、生ゴミを腐らさない駄目との見解で、嫌気腐敗槽を設けて加温装置を施すなど大変困難を極めたと聞き及んでいます。

現在は、生ゴミ可溶化槽は臭気の発生し難い好気処理の構造となっています。しかし、初期に設置の処理槽は構造変更ができなく腐敗臭と害虫と汚泥の引き抜きに悩まされている箇所も散見されています。

今は、そのような処理システムにもメンテナンスの力で、汚泥・臭気問題が解決できるシステムができ上がっています。

難産の末に誕生したシステムを守るのは、メンテナンスの技もその一つです。(プロジェクト推進室)

汚泥ゼロ・臭気ゼロ

ハイブリッドシステム推進中！

株式会社クリーンテックサービス